

[様式14]

(対象事業：子どもを対象とした事業およびその開発にかかる事業)

事業名：特別展「カキを育てる海

ー私たちの海のことみんなで調べました」

事業者名：海の博物館

(財団法人東海水産科学協会)

連携事業館名：鳥羽市立鏡浦中学校

鳥羽磯部漁業協同組合浦村支所

住所：三重県鳥羽市浦村町大吉1731-68

TEL：0599-32-6006

FAX：0599-32-5581

HPアドレス：<http://www.umihaku.com>



①施設概要

海の生きた先人たちの知恵や歴史、文化を後世に伝える博物館として30数年間活動が続けており、5万7千点にもおよぶ漁撈用具や漁村の信仰、生活用具などの海に関連する実物資料を保存している博物館です。

②事業の意図目的

中学生が地元の産業の歴史や自然環境などを調査・記録して、博物館で特別展示を行うとともに図録を作成して、その成果を第三者に伝える。そして、一連の活動を通して、地域に暮らす人々との世代を越えた交流を深め、調べ上げ記録したさまざまな情報を町おこしのために活用していく。

③事業概要

中学生が地元のカキ養殖の歴史を漁業関係者、老人会、町内会を訪ねて聞き取り調査を行い、また海の博物館の文献資料や実物漁撈資料などにふれ、現在のカキ養殖の現状を調べ、それらの成果をまとめて海の博物館で特別展示を開催した。中学生たちは、カキを育てる海と川や山のかかわりを調べるため、川の上流の山に上り、海の調査も行い、カキ養殖の作業体験も経験した。そして、彼らの行った調べ学習の感想も、特別展の中で紹介した。一連の調べ学習の成果と中学生の感想を加えた図録を作成して、地元の鏡浦地区（今浦、本浦、石鏡地区）の全戸、県下全中学校、県下全教育委員会、県下の水産関係団体などに配布した。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物

特別展開催告知ポスター 800枚

特別展開催告知チラシ 13000枚

図録「カキを育てる海ー私たちの海のことみんなで調べましたー」

(A4版 カラー30ページ) 900部

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 9,792 人 (大人8,780人、子ども1,012人)

内 訳 有料入館者数 8,994人 (内 大人8,176人、子ども818人)

無料入館者数 798人 (内 大人 604人、子ども194人)

(1) 事業の実施状況について

特別展「カキを育てる海」の開催に関して、昨年3月の時点で芸術拠点形成事業に申請することを鏡浦中学校に相談して、了承をいただきました。ただ学校行事は、4月中にはほぼ決まってしまうため、仮に採択されなかったとしても生徒たちと調べ学習を行っていくことを決めて、申請書類を送付しました。

活動は、まず博物館の見学から始めることにしました。地元の漁業の歴史などを生徒たちに見学してもらい、その感想をもとに班分けをして調査研究の課題を決め、調査活動に入ってもらいました。それと平行して、漁業組合、鳥羽市役所、教育委員会などにも博物館と中学校が調べ学習をすることを説明して、調査への協力をお願いしました。

事業への採択が決まって、鏡浦中学校、漁業組合長、鳥羽市水産研究所長、海の博物館と再度活動内容の検討を行い、生徒たちの調べ学習に入りました。調べ学習は夏休み期間中にも行うことから、7月20日に開催の鏡浦地区青少年育成会総会の場で、芸術拠点形成事業について説明を行い、集まった地域の人々に生徒たちの聞き取り調査などへの協力をお願いしました。また9月5日には、PTA会長、校区の三地区の町内会長、老人会、漁業組合長、鳥羽市教育長のみなさんに集まってもらい芸術拠点形成事業について説明、博物館と中学校で行う事業への理解と協力をお願いしました。

中学生たちは、9月20日の総合的な学習の時間を利用して浦村地区の海が見える朝熊山山頂に登り、伊勢湾と浦村の海のつながり、宮川や五十鈴川の河口との距離などを自分たちの目で確かめました。10月2日には浦村のカキ養殖業者の人たちも植樹した「三重漁民の森」のある宮川上流の総門山に上り、広葉樹や針葉樹の森を歩き、腐葉土を掘り、川の源流を見るなどの活動を通して、山と川の水と海の関係などについて学びました。10月16日にはカキ養殖の一日体験を行い、現在の種ガキの取り付け作業などを体験しながら、カキ養殖の変化などを養殖業者から教えてもらいました。

また9月から11月にかけての総合的な学習の時間を利用して、浦村地区の海辺で透明度やプランクトンの調査を行った班もあります。11月7日には、2年生が社会科の時間を利用して博物館を訪れ、明治から大正時代のカキ養殖が始まる以前の地元の漁業について、古文書や絵図などに触れながら調査を行いました。さらに先輩たちが過去に調べた浦村カキに関する資料が学校には残されていて、それらの資料も参考にしました。

多くの活動を行ってきたことに関して、中学生に何度か感想を書いてもらいました。そして、集まってきた資料や写真を整理して、中学生の感想も紹介しながら、先生たちと相談を重ねて展示パネルを作り上げていきました。

展示会場には、カキ養殖の初期の種サシ（種カキを吊るす状態）、昭和30年代の種サシ、現在の種サシという3種類の変遷を中央部に展示することに決め、それらの製作を中学生にやってもらいました。手作業と機械で作りあげていく現在の方法は、一日体験で経験済みですが、竹で作



総門山での学習



カキ養殖の一日体験の様子

ったハリを使って一個づつ手作業で種カキを止めていく30年代の方法や針金に短く切った竹筒を通して種カキを固定して作っていく昭和初期の方法は、調査の中で分かってきた養殖方法です。量はわずかですが中学生に作ってもらうことで、昔の手作業を経験してもらい展示に使用しました。また展示には大量のカキの殻を使うため、カキ殻をくっつける作業も生徒たちが行いました。展示台や展示品を運び、作り上げた種サシを吊るし、完成したパネルを取り付け、特別展は12月26日に完成、27日中学生全員に集まってもらいみんなで見学をして、12月31日から開催しました。



展示準備の様子



特別展会場

特別展は、3月31日までの3ヵ月間ですが、その間の2月23日には浦村町で「牡蠣の国まつり」が開催され、中学生たちもスタッフとして参加しました。今年のまつりは8000人程の入場者があり、ノロウィルスの風評被害があった昨年と違って大盛況で、中学生たちも最後まで大忙しでした。3月5日には、海の博物館で研究発表会を開きました。4月に中学校に上がる鏡浦小学校6年生11人も参加、地元のカキ養殖業者さん、PTA、教育委員、県の水産関係者など大勢の人たちが集まってきて、90名準備した会場に入れない人も出るほど盛況でした。

図録（報告書）は、特別展で使用した展示パネルを修正したものを基本に、生徒たちの感想も掲載して編集しました。全部で900部作成して、鏡浦中学校の校区である地元鏡浦地区（本浦、今浦、石鏡）の全戸、県下の全中学校、市町村教育委員会、水産関係団体などに配布しました。

（2）地域との連携について

中学生と博物館が協力して、地元の中心産業であるカキ養殖の歴史や現状を調べて、特別展を開催することを、申請段階から漁業組合や鳥羽市の水産関係者に相談しました。また7月20日に鏡浦地区青少年育成会総会の場で、芸術拠点形成事業について説明を行い、集まった地域の人々に協力をお願いしました。さらに9月5日には、PTA会長、校区の三地区の町内会長、老人会、漁業組合長、鳥羽市教育長のみなさんに集まってもらい博物館と中学校で行う事業への理解と協力をお願いしました。

地域に博物館と中学校が調べ学習をしていることが伝わり、古い写真などの資料や昔の養殖方法などに関する情報が集まってきました。また鳥羽市や三重県の水産担当者からも、浦村カキ、プランクトン、伊勢湾の海流などに関する情報や資料の提供を受けました。展示の準備が始まって、現在の

養殖関連用具類の展示物は漁業組合の資料や博物館に搬入しやすいカキ養殖業者さんから借用することができました。特別展のポスターは、浦村地区の焼きカキ屋さんの店先や道路沿いに張ってもらい、チラシと招待券を町内会の協力で地域の全戸に配布してもらいました。

展示が始まると直ぐに、4月に中学校に上がる6年生11名が見学に来てくれました。カキ養殖に携わる人たちの見学は、カキ養殖の作業が一段落した3月になって多くなってきました。2月23日には浦村海岸で「牡蠣の国まつり」が開催され、中学生もスタッフとして参加しました。祭りの実行委員会の人達は、特別展のポスターを会場に張って、チラシも総合受付で配布してくれました。天候にもめぐまれ8000人程の人が集い、昨年とは違い大盛況でした。この祭りの準備会の場で、特別展を見学した養殖業者の人が「中学生が浦村カキのことを一生懸命調べて博物館で展示してくれている。俺らも牡蠣の国まつりをしっかりとやらなあかん。」と発言をしてくれました。

3月5日に海の博物館で開催した発表会には、先に特別展を見学に来てくれた6年生も参加して



発表会に集まった人々

くれ、小学校の校長先生、鳥羽市の教育委員5名、鳥羽市や三重県の水産担当者、そして地元浦村地区のカキ養殖業者の人達が大勢で訪れて、90席の会場はあふれてしまい、地元の人たちの関心の高さに驚きました。

3月29日には、漁業組合と共同で特別展とカキ養殖漁場を見学してカキを食べる「浦村カキを見学・味わう会」を企画公募したところ、定員をこえる申し込みがあり、特別展の見学と「浦村カキ」を味わってもらいました。地域の産業を理解してもらうために、博物館と漁

業組合が協力して「浦村カキ」PRする催しが特別展の開催をきっかけに始めることができました。

(3) 成果物について

- ・ 特別展開催告知ポスター 800枚
- ・ 特別展開催告知チラシ 13,000枚
- ・ 「カキを育てる海 ―私たちの海のことみんなで調べました―」
(A-4版 32ページ) 900部作成／配布
- ・ 「浦村カキ関連年表」の作成(図録に掲載)
- ・ 浦村地区やカキ養殖関係の古い写真の入手(一部図録で紹介／保存)

(4) 参加者の反応

中学生たちは、学習を進めていく中で抱いた疑問を解決しよう懸命でした。そして自分たちが調べていることがどうなるのか、なかなか理解できなかったようです。しかし、集まってきた情報を元に展示物を復元(作成)したり、展示物を吊り下げたり固定したり、自分たちが調べた成果や感想を書き加えたパネルが完成してきて、全体の展示が出来上がってくると、とても嬉しそうでした。展示が始まって、家族と一緒に見学にきた生徒もいました。両親に自分たちが調べてきたこと、展示物を製作したことなどいろいろと説明をしていました。

特別展を見学した感想はさまざまです。鳥羽市の教育長さんからは「よく調べている。しっかりした内容、浦村カキのことがよく分かる。ここまでやるのは大変だったでしょう。」との感想をいただきました。またある市議員は、市民に配布したチラシの中で『郷土のカキ養殖。どのようにして生まれ、現在に至ったのか。その間、どんな苦闘の歴史があったのか。子どもたちは研究した。展示したパネルの一つひとつに、勉強ぶりが出ている。地域の漁業と働く両親、家族を尊敬する中学生がここにいた。鳥羽はいい子どもたちを育てている。』と特別展を観た実感を紹介してくれました。

カキ業者さんたちは、生徒たちが復元した針金と竹筒を使った初期の養殖方法に「最初はこんな方法だったのか」と興味を示し、また自分たちが経験のあるワラ縄をコールタール染めにした展示を見て「懐かしいな」、「よく調べている」、「みんなに見にくるように宣伝するはな」などの感想を述べていました。

水産関係者からは「浦村カキに関する情報がたくさん紹介されている。図録は分かりやすく、浦村カキをPRする情報源として活用できるし、年表も大いに参考になる。カキ養殖の始まりは非常に興味深く見学しました。」との声を掛けてもらいました。

ある学校の先生からは「こんな総合的な学習ができたらい。地域に暮らすいろいろな人たちと子どもたちが触れ合い、博物館と学校が協力してさまざまな活動を行っている。子どもたちは、この調べ学習で大いに成長したでしょうね。」との感想をいただきました。

一般の見学者からは「カキは養殖で育てていることは知っていても、実際にどんな方法で行っているのか知らない。展示を見て、その方法がよく分かった。」、「浦村のカキ養殖の始まりが80年前だったのには驚いた。もっと昔からやっていたのだと思った。」などの感想をもらいました

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

活動の取り組みの中で、博物館に何度も中学生がきてくれ、博物館の保管する地元の実物資料や古文書、絵図などにふれてもらったことで、博物館を自分たちの身近な施設だと感じてもらいえたと思います。また中学校と博物館が協力してカキ養殖の歴史などを調べて展示することが地域に伝わり、古い写真、昔の養殖方法、海の環境などの資料や情報を多くの人々から提供してもらい、博物館で保存することができました。

中学生たちは、自分が疑問や興味を持ったことについて、自分で動いて懸命に調べ学習を続けたこと、その成果を自分の感想も含めて特別展という形で伝えたこと、カキ業者さんや漁協の人たちなどの地元で暮らす多くの人たちと話をする機会を持てたこと、世代を越えた交流がもてたことなど、これらも事業を実施した大きな成果といえます。

特別展が始まってからは、新聞やTVで報道されたこともありカキ養殖に携わる人たちだけでなく、地元の人々も特別展を見学にきてくれました。初めて博物館に来た人も多く、特別展の見学だけでなく地域の歴史を記録した資料が保管されていることも知ってもらえました。3月5日に博物館で開いた中学生の発表会には、4月に中学校にあがる小学校6年生含めて大勢の参加者があり会場があふれてしまいました。父兄やカキ養殖業者の他に、県の水産関係者、鳥羽市の5人の教育委員の姿などもあり、博物館と中学校が初めて取り組んだことに多くの人たちが感心を持ってくれたことなどが分りました。

特別展の内容と生徒たちの感想も紹介した図録を作成できたことも大きな成果です。鏡浦地区の全戸をはじめ、県下全中学校、鳥羽市や三重県の水産関係者に配布することができました。掲載されている「浦村カキ」に関する年表やさまざまな情報、また博物館と中学校で取り組んだ調べ学習の活

動の経験は、今後有効に活用されると思われます。

一連の活動が続けてきたことで、生徒たちや先生方には「博物館の活動」を理解してもらい、地域の人々には「博物館」がより身近な施設であることも知ってもらえたと思っています。そして、地域にちなんだテーマで中学校と協力して調べ学習続けたり、発表会や企画展などを開催する活動が続けていくことが、博物館と地域をより繋げていくと考えます。

鳥羽の名産「浦村カキ」学ぶ

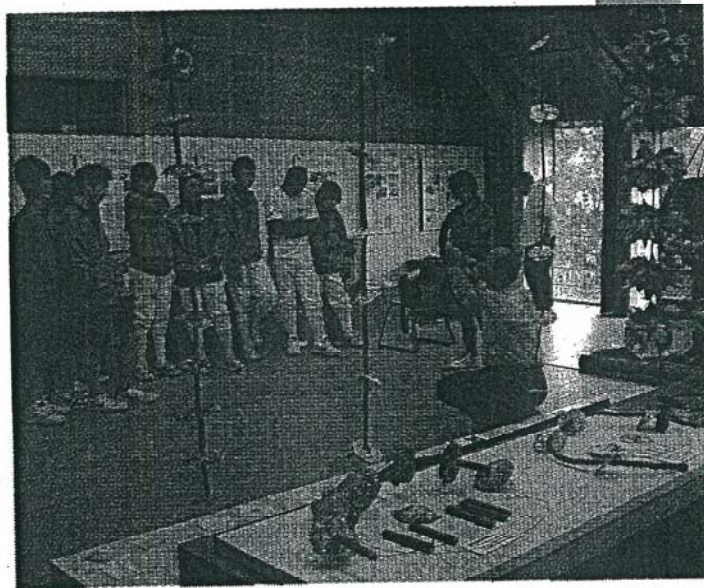
鳥羽市浦村町の市立鏡浦中学校（松田健校長）全校生徒23人が、地元の名産「浦村カキ」について体験学習で学んだ成果を、同市の「海の博物館」（石原義剛館長）の特別展として発表する。「カキを育てる海」私たち海のこと みんなで調べました」と題し、31日から養殖に使う用具類などを展示。生徒らは「地場産業と古里の海への理解を深めることができた」と意義を語り、来場を呼びかけている。生徒らは5月末から12月にかけて、総合学習の時間を利用して、同博物館学芸員平賀大蔵さん（54）や地元の漁業者の協力を得て、浦村町

2007.12.30

鏡浦中が成果発表

養殖の歴史やボラ漁紹介

▼ 特別展を前に、平賀さん（手前右側）の話を聞く鏡浦中の生徒



あすから海の博物館で

内のカキ養殖の歴史やボラにと、海中に種ガキを下げた。漁などについて調べてきたための「種ガキ」を時代ごとに並べた。針金に竹の筒と種ガキを交互にさす方式の昭和初期のものから、

特別展では、ひと目でカキ養殖の変遷が分かるよう、式の昭和初期のものから、中高校生400円。

化学繊維のロープを使い、種ガキをクギで止めている現在の種ガキまで、養殖方法を再現しながら、用具類計約130点を展示している。

このほかパネルで、生徒が実際に海に出て調べた海水の透明度や、カキの餌となるプランクトンなどを紹介している。

松田校長は「地元の歴史や、地域の人々の営みに触れ、古里を愛する生徒が育つてきていると感じる。博物館との連携を図ることで、深く学べる学習プログラムを組むことが可能になった。生徒の視野も広がった。生徒の視野も広がった。展示は来年3月31日までで、入館料は大人800円、小

鏡浦中生と「海の博物館」連携

全校生徒が企画「力キを育てる」開催

鳥羽市浦村町の海の博物館で、同町の鏡浦中学校の全校生徒二十三人が企画した特別展「力キを育てる海」私たちの海のこと みんなで調べました」が開かれている。特別展は、文化庁の芸術拠点形成事業の一環。生徒は昨年一年間、同博物館の協力を得て、力キ養殖の歴史や漁具の変遷などを継続的に学んだ。松田健校長は「展示会は学習の集大成。地域の歴史理解にもつながった」と双方の連携に意義を深めている。三月三十一日まで。

(奥野賢二)

芸術拠点形成事業は昨年度に始まった文化庁の芸術拠点形成事業で、博物館や美術館が持つ歴史、文化、ちづくりを生かそう



特別展の展示作業をする鏡浦中の生徒ら。いすれも鳥羽市浦村町の海の博物館で(昨年12月20日)

養殖の歴史、漁具の変遷 1年間の学習成果を発表

(文化庁)と全国の施設を対象に企画を公募。採取した五十一事業のうち、同博物館と同時の特別展が、県内で唯一選ばれた。

浦村町は東海地方有数の力キの産地として知られる

が、鏡浦中では東海地方有数の力キの産地として知られる



さまざまな漁具を紹介する特別展

でなかった。同博物館が学校に声を掛け、昨年四月から総合学習の時間で、漁業の歴史や力キ養殖作業の体験、海と山の環境のかかわりなどを継続的に学習。大台町の宮川上流や、朝熊山の山頂にも出掛けるなど、フィールドワークにも取り組んだ。特別展の展示品の一部も生徒が作製した。力キ養殖の変遷のコーナーでは、海中に種ガキを下げるための「種サシ」を時代ごとで紹介。針金に竹筒をつたことが多かった。産業の歴史と種ガキを交互に刺す昭和初期の方式から、化学繊維のロープを使った現在の養殖作業を模型で再現したほか、約百三十点の用具類を展示した。また、生徒が実際に海に出て調べた海水の透明度とした上で、「地域史や環境問題などを学ぶ場として、他の学校にも地元博物館を積極的に利用してもらえれば」と話している。

力キ養殖の「謎」調査

鳥羽の中学生 研究成果を展示



浦村の力キ養殖を紹介する特別展。地元の中학생たちの研究成果を展示している＝鳥羽市の海の博物館で

鳥羽市浦村町の「海の博物館」で、地場産業の力キ養殖を体系的に紹介する特別展「力キを育てる海」が開かれている。展示は、地元の鏡浦

海の博物館
3月末まで

中学校の全校生徒23人と博物館による共同研究の成果。「中學生が足で調べた力キ養殖研究の集大成」といえる内容だ。3月31日まで。

漁具再現 ■ 殻の行方追う

約120平方メートルの特別展示室には漁具などの展示物130点、写真やクラフ、表などのパネル20枚が並べられている。養殖の歴史や現状について

のほか、力キを育てる豊かな自然の秘密、大量に排出される貝殻の行方など、興味深いテーマを各コーナーで取り上げた。共同研究のきっかけは、博物館が学校と連携し地域の文化振興を図る文化庁芸術拠点形成事業。海の博物館学芸員の平賀大蔵さん(54)が昨年4月、力キ養殖の体験学習に取り組んでいる鏡浦中学校に持ちかけた。

生徒たちは平賀さんの話に耳を傾けるうち、「なぜ浦村が力キ養殖に適しているのか」などの疑問を次々と持ち、研究に入った。生徒たちは、明治時代の竹製の養殖漁具を手作りで再現した。また、「1年で大粒の力キが育つ」という浦村の豊かな海の秘密を探ろうと、栄養分を注いでいるとみられる宮川源流の総門山(948メートル)への調査登山を試みるなど、自分たちの体を使って研究を進めた。

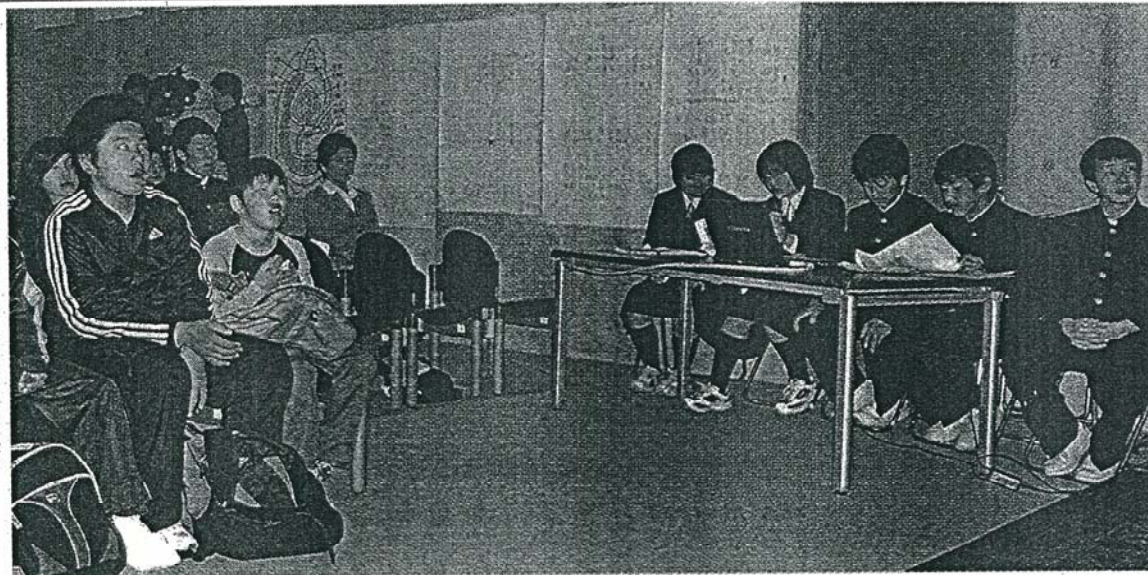
大量の殻が粉碎され、野菜栽培の肥料に加工されている市開発公社の処理工場を訪ねた後には、実際にトマトやキュウリを栽培して、優れた肥料として役立つということを実感した。

平賀さんは「海の透明度調査などは、パソコンでデータを簡単に入手できるのに、生徒たちは自主的に手製の道具を作り、毎週5カ所で定点観測した。いつまでも力キ

養殖が続いてほしいという願いがこもっていた」とたたえた。

松田健校長も「海だけでなく山も含んだ自然全体を意識し、体系的に研究したのは素晴らしい。生徒たちは自信をつけたはず。数多くの人に展示を見てほしい」と話している。海の博物館(0599・32・6006)は入館料800円。特別展の開催期間中は無休。

見もの
聞きもの



海の問題などを研究発表する鏡浦中の生徒(右側) 鳥羽市浦村町で

鳥羽の海1年かけ研究

赤潮などの問題や
カキ養殖体験発表

年間を通して海の問題を学んでいる鳥羽市浦村町の鏡浦中学校の全校生徒二十三人が五日、同町の海の博物館で研究発表会を開いた。生徒は学習テーマごとにグループに分かれ報告。出席した地元住民や保護者ら約四十人に一年間の成果を発表した。
(奥野賢二)

海の博物館で鏡浦中生

同校と同博物館は、博 料を紹介しながら、赤潮博物館が持つ地域資源を やらみ がもたらす環境へまろづくりに生かす文化 の影響、カキ養殖の体験庁の「芸術拠点形成事 などを説明した。

業」に参加。生徒は総合 石原義剛館長は「生徒学習の一環として昨年は一生懸命勉強した。若四月から、同博物館の協 世代が、地元の仕事を力で環境問題や漁業の歴 育てていくいい機会にな史を継続的に学んでき 成果に期待を寄せ、松田た。

発表会では、三十五人 健校長も「この地方ならの生徒が六つのテーマに ではの教育の一つとし分かれ発表。地元漁協や て、今後も博物館を積極海女、市環境課への取材 的に利用していきたい」などを基に作った映像資 と話した。

○テレビ、関連誌等

アイTV放送（有線放送TV）「地域のニュース」

平成19年12月21日 「カキを育てる海」特別展準備 （3分程度）

平成20年1月10日 「カキを育てる海」特別展 （3分程度）

平成20年3月6日 「カキを育てる海」研究発表会 （3分程度）

NHKTV放送「地域のニュース／鏡浦中学校研究発表会」

平成20年3月5日 6時40分～42分（2分程度）

8時50分～52分（2分程度）

平成20年3月6日 7時35分～37分（2分程度）